



2016年4月15日発行（季刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2016年4月  
第106号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久



## 目 次

漢点字の散歩（43）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（99）（山内 薫）	12
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	16
漢文のページ	23
ご報告とご案内	25
編集後記（木下和久）	27

# 漢点字の散歩（四十三）

岡田 健嗣

漢点字版『萬葉集釋注』第四巻が

完成しました



本会が、伊藤博著『萬葉集釋注』（集英社文庫・ヘリテージ・シリーズ）の漢点字訳に着手してから、久しい時を過ぎました。2012年度から横浜氏中央図書館に納入させていただいて、2015年度は四年目となりました。毎年一冊ずつ完成することができて、今回は第四巻の納入となりました。

この二十年に渡って、毎年何冊かの漢点字書を製作して、図書館に納入して参りました。これらの漢点字書は、会員の皆様の汗と努力の結晶というべき作品ですし、またそれを受け入れて下さっている図書館の、視覚障害者の言語と文字の文化の振興へのご理解の賜であることを、視覚障害者の一人である私自身、強心に留めなければいけないことと、肝に銘じております。深く御礼申し上げます。

今回完成致しました『萬葉集釋注』第四巻は、万葉

集の巻七と八が収められた巻です。歌を歌群として捉えて、一首あるいは何首かの歌を歌番号順に掲げて、その後ろに伊藤先生の解説が「釈文」として収められております。伊藤先生は、万葉集を一首一首の歌の集合体として捉えるだけでは不十分で、歌の並びが一つの流れとなつて、全体として物語を形成していると言われます。「釈文」では、その流れを抽出し、その巻の成立事情とともに、当時の宮廷や社会や文芸の有り様を説いて下さっています。

巻一から六は、「小万葉」とも呼ばれて、万葉集が万葉集である、その個性を豊かに表した秀作によって編まれています。この六つの巻を味わうことで、概ね万葉集を鑑賞することになるとも言われます。その意味では既に私たちは、万葉集の明かす歌と思想の世界を、ほぼ知り得る環境を得たとも言えるのでしよう。誠に漢点字の力と言うべきです。漢点字と川上先生、並びに漢点字書を製作して下さっている会員の皆様、これを受け入れて下さっている図書館の関係者の皆様には、感謝に堪えません。

巻七以下はその意味では、それまでとは少し様相を異にしています。むしろ編者の力の入れ所が、鑑賞の

主眼となるようです。

巻七の特徴・巻八の特徴については、三田誠司先生の解説をお読みいただくのが、この巻のご紹介としては最も適切に思われます。以下に、全文を引用させていただきます。ご精読下さい。

《万葉集解説 四（三田誠司）

☆巻七〜巻十二と「人麻呂歌集」

巻七から巻十二までの六巻は、いずれも「柿本朝臣人麻呂（かきのもとのおそみひとまる）歌集」の影響のもとに編まれたという点で共通している。

『万葉集』の編纂に利用された「人麻呂歌集」には、「常体人麻呂歌集」、「詩体人麻呂歌集」と、上記二本とは別の「異本常体・詩体人麻呂歌集」（一本にまとまっていたとは限らない）とがあった。

「常体人麻呂歌集」は、

痛足河 河浪立奴 卷向之 由槻我高仁 雲居立有

良志（七一〇八七）

（穴師川 川波立ちぬ 卷向の 弓月が岳に 雲居  
立てるらし  
あなしがは かわなみたちぬ まきむくの ゆつき  
がたけに くもゐたてるらし）

のように、助詞・助動詞を比較的丹念に記す「常体表記」（非略体表記）の歌からなる。これは、人麻呂の宮廷生活における自他の歌の集、すなわち雑歌（ぞうか）集であった。

「詩体人麻呂歌集」は、

春楊 葛山 發雲 立座 妹念（一一・二四五三）  
（春柳 葛城山に 立つ雲の 立ちても居ても 妹  
をしぞ思ふ

はるやなぎ かづらきやまに たつくもの たちて  
もゐても いもをしぞおもふ）

のように、助詞・助動詞をほとんど省略する「詩体表記」（略体表記）の歌からなる。こちらは、宮廷の中下層の人々を中心とする男女の歌の集、すなわち相聞（そうもん）歌集であった。上記二集は、人麻呂本人

が、その活躍中（六八七〜七〇三年）の後半期頃に編纂したと察せられる。それに対し、「異本人麻呂歌集」は、上記二集が伝来の間に異同や増幅を受けて成り立ったもので、一本とは限らない。

「常体人麻呂歌集」は主に巻七、九、十の編集に利用され、「詩体人麻呂歌集」は巻十一の編集と関わり、「異本人麻呂歌集」は巻十二の編集に用いられた。なお、本書の積文では現在一般的な名称となっている「略体」「非略体」の語を用いている。が、本解説では、本解説のもとになった『萬葉集釋注』十一別巻および『古代和歌史研究』の用語に準じ、「詩体」「常体」の語を用いることとする。

共通して、「人麻呂歌集」と関わる巻七〜十二であるが、それぞれの巻の形成過程は長く複雑である。ごく大雑把に言って、編集作業には三つの段階が想定できる。第一は、神龜（じんき）初年（七二四）以降数年間の奈良朝風流侍従たちの営み、第二は、天平（てんぴょう）五、六年（七三三、七三四）頃の大伴坂上郎女（おおとものさかのうえのいらつめ）や笠金村（かさのかなむら）・山部赤人（やまべのあかひと）たちの営み、最終的には天平十六、十七年（七四四、

七四五）頃の大伴家持（おおとものやかもち）・市原王（いちのはらのおおきみ）たちの営みである。

これらの段階は、先行する巻一・巻二の追補や、巻三・四・五・六の形成段階でもあった。したがって、巻七〜巻十二も、これら他巻の形成と密接に関わっている。さらに、天平十七年段階以降の手入れもあったらしく、すべての巻のすべての歌について一々の編集過程を明示することは困難である。以下、各巻ごとに、推定される編集過程のあらましについて略述することとする。

#### ☆巻七の成り立ち

巻七は、「雑歌」「譬喻歌（ひゆか）」「挽歌（ばんか）」の三部立（ぶだて）。「柿本朝臣人麻呂歌集」の歌と「古集」の歌に奈良時代の作者不明歌群を合わせて成っている。さらに、「雑歌」は「…を詠む」（詠物）の小題のもとに、「譬喻歌」は「…に寄す」（寄物）の小題のもとに、それぞれの歌が配置されている。この点、巻十が「雑歌」と「相聞（そうもん）」を四季分類し、それぞれに詠物と寄物の小題を付しているのとよく似ている。巻七と巻十とは、共通

の資料をもとに、無季の歌は巻七へ、季節の歌は巻十へという基本方針で、連れ立って編纂されたものと推測される。

巻七「雑歌」は、Ⅰ 詠物部（一〇六八〜一二九）、Ⅱ 羈旅（きりよ）部（一一三〇〜二五〇）、Ⅲ 雑部（一二五一〜九五）の三部からなる。Ⅰは、詠物の小題ごとに分散配置された「常体人麻呂集」歌（「異本人麻呂集」からの詩体歌一首を含む）と、五二首の天平期出典不明「無季雑歌集」とから成り、Ⅱは、終始旅の歌を集めた上で「古集」の名のもとにまとめられている。一方、「譬喻歌」は、その前半部分に、巻十一の基礎資料となった「詩体人麻呂歌集」から抜き出した歌を一括して配置し、その後天平期の作者不明の譬喻歌群を並べている。最後の「挽歌」には、「人麻呂歌集」の歌はない。

このように、巻七では、人麻呂歌集の扱いをめぐって二つの基準が見られる。「雑歌」詠物部では分散方式に、「譬喻歌」では一括方式になっているのである。この不統一現象は、巻十にも見られる。すなわち、巻十「秋雑歌」は、巻七「雑歌」と同じく小題ごとに「人麻呂歌集」歌を分散させ、巻十の他の部で

は、巻七「譬喻歌」と同じく部立の冒頭に一括しているのである。この不統一は、巻七「雑歌」のもとになった「無季雑歌集」と巻十「秋雑歌」のもとになった「秋雑歌集」とが、現存巻七の編纂に先立って誰かの手によって編まれていたと考える時、もつとも素直に解ける。

神龜年間の頃、「人麻呂歌集」をもとに、現在の巻十一などに成長してゆく原歌卷（うたまき）を構成し、つつあった編者たち（奈良朝風流侍従）によって、「人麻呂歌集」と「出典不明歌群」とからなる巻七原本と巻十原本が編まれた。その折の巻七原本は、「雑歌」だけであった。件の「無季雑歌集」は、この神龜の編者たちの誰かが、それ以前に手すさびに編んでおいたものではないかと思われる。

次いで、原本巻十二の形成に関わりつつ、天平五、六年頃、若干の詠物歌が補われ、巻七原本がほぼ完結した。その原本を受け継いだ、大伴家持たち天平十七年段階の編集陣が、原本巻十一の「古」の部にあつた「人麻呂歌集」の譬喻歌を一括して巻七へ移し、原本巻十一・巻十二の出典不明歌から切り出した譬喻歌をその後ろに据えて今見る形の巻七「譬喻歌」の部を作

った。さらに「挽歌」を加えて三部立とし、ここに現存巻七の姿が整った。

巻七「雑歌」の構成が、やや雑然とするのに対し、「譬喩歌」が整然としているのは、このような形成段階の違いによるものなのである。「人麻呂歌集」の扱いの違いも、編者層の違いに基づくものだったのである。

#### ☆巻八の成り立ち

一方、巻八は、歌を春夏秋冬の四季に分類し、その中をさらに「雑歌」「相聞」とに分けるといふ編纂方針をとっている。そして、各季の雑歌、「春雑歌」

「夏雑歌」「秋雑歌」「冬雑歌」のすべてが、天平期の歌群の前に白鳳（はくほう）期の歌群を置いている。「相聞」では「秋相聞」だけが、同じ姿勢を示している。これは、他の季節にはふさわしい白鳳期の相聞の歌が得られなかったためであろう。それにしても、各季の冒頭に古い歌群を掲げ、その後ろに新しい歌群を掲げるといふ「古今（こきん）照応」の構造は一貫している。人麻呂歌集の利用こそないものの、編纂意識の上では、明らかに、巻七や巻十と連れ立つ。巻八は、巻七、巻十などとは異なり、作者名がはっ

きりと記されている。ところが、巻八の記名の中には、「大伴宿禰（すくね）家持」のように作者の「姓（かばね）」を記すものと、「大伴家持」のように「姓」を省略するものがある。さらに、「姓」を記す歌の題詞には、雑歌の場合、「大伴宿禰家持が雪梅の歌一首」（八一六四九）のように、「作者名」＋季物＋歌何首の型を、相聞の場合、「大伴宿禰家持、安倍女郎（あへのいらつめ）に贈る歌一首」（八一六三一）のように「作者名」＋贈・報の類

＋歌何首の型を有するものが多いことが指摘されている。「姓」は氏の社会上の身分を示す重要なもので、この不統一は、不注意による偶然とは考えにくい。これは、巻八のもととなった資料の差による現象と考えるべきである。そこで、「姓」を記し、題詞に上記のような型をもつ歌を諸般の事情を考慮しつつ抽出すると、「春」一一首、「秋」七四首、「冬」一〇首からなる季節分類の小歌集ができあがる。この小歌集は、各季の冒頭に白鳳期の名歌一首を巻頭歌のごとく据えている。この構成は、巻一、二以来の方法で、特に、家持がかかわった巻三「譬喩歌」の形態に酷似する。この小歌集は、天平十五、六年頃、大伴家持が

「季節分類大伴宿禰家持歌集」（以下「宿禰家持歌集」と略称）として編んだ一巻であったらしい。

巻八は、巻七々十二までのまとまりの中で、ただひとつ「人麻呂歌集」の歌と無縁な姿を示している。しかし、その基盤となった「宿禰家持歌集」は、「人麻呂歌集」を参考としつつ編まれた形跡がある。というのは、「宿禰家持歌集」は、「夏」の歌を持たなかったのだが、季節の歌を含む「常体人麻呂歌集」もまた、「夏」の歌を持たなかったらしいからである。

「人麻呂歌集」は、宮廷人の作歌治道書（ちどうしよ）として高貴なる庇護者に献ぜられる万葉の私歌集の魁（さきがけ）であった。その伝統に習いつつ、内舍人（うどねり）家持が、聖武（しようむ）帝のたった一人の男子、安積皇子（あさかのみこ）に献呈した歌巻が、「宿禰家持歌集」であったらしい。つまり、形態の上でも精神の上でも、「宿禰家持歌集」は「人麻呂歌集」の影響を深く受けているのである。

巻八は、この「宿禰家持歌集」に、家持や大伴坂上郎女が持っていた天平期の資料を合わせることで成り立ったものと思われる。ここで合わせられた資料は、もとは、巻三や巻六の編集に用いられた天平期歌群と

同居していたもので、その中から季節にかかわる歌は巻八へ、宮廷に強くかかわるものは巻六へというように分散されたのである。

かくして巻七、巻八は、天平十七年頃、巻一から巻十六までのいわゆる万葉第一部を形成する過程の一環として、成立したのである。

〔本解説は、一般の読者に、伊藤博氏の万葉集の構造と成立の論を紹介することを目的として、『万葉集釋注』十一別巻（一九九九刊）および『万葉集の構造と成立』上・下（一九七四刊）の記述をもとに、その要点・結論だけを略述したものである。〕

この三田先生の解説の後ろに私がものを申すのは、誠に不遜に過ぎるに違いありません。しかし右の解説と伊藤先生の「釋注」を拝読して、私なりの感想を得ました。お許しいただいて、少し述べさせていただきます。

右の三田先生の解説にある、巻第七の特徴として取り上げられている「人麻呂歌」の二つの表記法、「非略体表記」と「略体表記」について、私はこの漢点字版の製作過程で初めて知る機会を得ました。伊藤先生

の解説によりますと、「雑歌」など公的な場で歌われる歌は「非略体表記」、「相聞」などごく私的な歌、場合によっては発表を想定されなかった歌は「略体表記」で表記されることが多く、それぞれ資料も異なっていたのであろうと言われます。このことに最初に着目したのは賀茂真淵で、前者を「常体表記」、後者を「詩体表記」と名付けました。それを現在では一般に、「非略体表記」と「略体表記」と呼んでいます。以下に、それぞれ四首づつ、原文・漢字仮名交じり文・総ルビの順に掲げます。

【非略体表記の人麻呂歌】

一〇九五

三諸就 三輪山見者 隠口乃 始瀬之檜原 所念鴨  
みもろつく 三輪山見れば こもりくの 泊瀬の檜  
原 思ほゆるかも

みもろつく みわやまみれば こもりくの はつせ  
のひはら おもほゆるかも

一〇九六

昔者之事波不知乎 我見而毛 久成奴 天之香具山  
いにしへの ことは知らぬを 我れ見ても 久しく

なりぬ 天の香具山

いにしへの ことはしらぬを われみても ひさしく  
なりぬ あめのかぐやま

一〇九七

吾勢子乎 乞許世山登 人者雖云 君毛不来益 山  
之名尔有之

我が背子を こち巨勢山と 人は言へど 君も来ま  
さず 山の名にあらし

わがせこを こちこせやまと ひとはいへど きみ  
もきまさず やまのなにあらし

一〇九八

木道尔社 妹山在云 玉櫛上 二上山母 妹許曾有  
来 紀伊道にこそ 妹山ありといへ 玉櫛箭 二上山も

妹こそありけれ

きぢにこそ いもやまありといへ たまくしげ ふ  
たかみやまも いもこそありけれ

【略体表記の人麻呂歌】

一二四七

大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉



大汝 少御神の 作らしし 妹背の山を 見らくし  
よしも

おほなむち すくなみかみの つくらしし いもせ  
のやまを みらくしよしも

一二四八

吾妹子 見偲 奥藻 花開在 我告与

我妹子と 見つつ偲はむ 沖つ藻の 花咲きたらば  
我れに告げこそ

わぎもこと みつつしのはむ おきつもの はなさ  
きたらば われにつげこそ

一二四九

君為 浮沼池 菱採 我染袖 沾在哉

君がため 浮沼の池の 菱摘むと 我が染めし袖  
濡れにけるかも

きみがため うきぬのいけの ひしつむと わがそ  
めしそで ぬれにけるかも

一二五〇

妹為 菅實採 行吾 山路惑 此日暮

妹がため 菅の実摘み  
に行きし我れ 山道に惑ひ この日暮しつ

いもがため すがのみつみに ゆきしわれ やまぢ  
にまとひ このひくらしつ

人麻呂の活躍した年代は七世紀後半、天武・持統朝のころと考えられます。八世紀初頭には『古事記』と『日本書紀』が編纂されて、わが国の正史として国内外に示されることになりました。これは大陸の史書に学んだもので、国家にはその国家の拠って経つ歴史がなければならぬ、それを証明するのが正史だということでした。わが国も独立国家として国際社会に名乗りを上げるには、この正史を持たなければならぬというのが、この「記・紀」の成立事情だったと言われます。『古事記』は字音仮名・字訓仮名という仮名文字の創出による読み下し漢文体、『日本書紀』は漢文体で表されています。そのためにクリアしなければならなかったのが、それまで存在しなかった、わが国独自の書記法の開発でした。そこで完成した『古事記』の読み下し漢文体が、初期の日本語の書記法となったのでした。二つの表記法による「人麻呂歌」は、この書記法の開発のプロセスを、如実に物語っているように思われます。

よく知られるように、現在に伝わる万葉集は、十世

紀半ばころ、村上天皇の委嘱を承けた、「後撰集」の選者である「梨壺の五人」と呼ばれる撰和歌所の寄人である大中臣能宣・清原元輔・源順（したごう）・紀時文・坂上望城（もちき）の五人の学者によって、当時の日本語の漢字仮名交じり文に翻訳されて伝わったものです。これが今日、私たちが読み、鑑賞することができる万葉集です。万葉集は、成立から約五十年で、当時の人々には、既に解読困難な文書になってしまっていたのでした。それだけわが国の表記法の変化と発展は早かったと言えるのでした。

わが国の書記法は、言うまでもなく漢文の訓読に始まります。漢文の訓読とは、漢字で表記された古代の中国の文献を、わが国の言葉に翻訳して読むことを指しますが、わが国の言葉と言っても、当時はそれを表す文字はありませんでした。そこでわが国の人々は大工夫をして、中国の文献を表している文字である「漢字」に、わが国の発音や意味を当てて読むようにし、さらに読む順序を替えたり、中国語にはない、日本語にだけある語句を付け加えたりして読む方法を編み出しました。このような指示符号（返り点）や読み仮名（送り仮名や助詞・助動詞）を、「訓点」と呼び

ます。次に漢文に訓点を付して、日本語として読み下すことができるようになりますと、さらに符号を外して漢文の骨格の文字そのものを並べ替えて、送り仮名や助詞・助動詞を行に連ねることで、「読み下し文」が完成します。この文の形式が、現在私たちが使っている日本語の現代文の原型と言ってよいものと考えられます。記紀・万葉の書記法は、正しく現代文に繋がる表記法への発展の直中にあるもので、後世の人々の解釈を経て、私たちの読み得るものとして現在に至っていると言いうことができます。

「人麻呂歌」の「略体表記」は、一見訓点を付されない漢文に似ています。この訓点を付されない漢文に似た文の形は、ごく私的な、場合によっては発表も想定しない文に用いられています。「非略体表記」は、公人としての人麻呂が、公人の役割として発表すべく製作した作品を形作っています。十全な日本語の文として提出するには、一字一句疎かにはできないが、私的な文では、テニヲハなどは、後から付け加えてもよろしいと考えたのかもしれない。私たちがメモを取るような場合にも、これに似た操作を行ってはいないでしょうか。しかも漢文に似ているとは言っても、

「略体表記」で表された作品も、日本語文の骨格をしつかり表しています。このことは「短歌」であるからという理由ばかりではなく、人麻呂が、日本語の表記を強く意識していることを示しているに違いありません。

人麻呂はこればかりではなく、現代文に繋がる日本語の表記の改革を、数多く試みているようです。たとえば韻律です。記紀・万葉にも沢山収められている旋頭歌や俗謡を、宮廷歌にまで高めるために、五・七・五・七：というリズムを完成させ、長歌と反歌との組み合わせ、長歌の最後のリズムを繰り返して、反歌で長歌に応える形式を成立させています。また旋頭歌や俗謡の特徴である掛け合い形式を、長歌の中に包み込む形、あるいは長歌の中に、掛け合いでは表現し切れない詩句を取り入れる工夫など、人麻呂以後の宮廷歌人が挙つてこの形式に従うことで、歌人としての命脈を保つように見えるほどに、大きな足跡と影響を残しました。

私はこの人麻呂の「略体表記」が、人類が文字表記を手にする最初期に、共通するあらがいを表しているように思われてなりません。中国の最初期、メソポタ

ミアの最初期、ヘブライの最初期、あるいはエジプトの最初期、そしてギリシアの最初期の文字表記に、叶うならば、そのような資料に当たってみたい気持ちを強く持ったのでした。

巻第八の特徴は、部立にあります。

『古今和歌集』（九一四年成立）に始まる勅撰和歌集以後現在まで続く和歌、あるいは和歌・連歌・俳諧から生まれて、松尾芭蕉によつて確立された俳句、このわが国の言語文化の底層を形作るのが、「四季」の観念です。巻第八は、日本人の心の底に脈打っている「春・夏・秋・冬」それぞれを詠われる和歌を集めることによつて表現されます。

私はけつして季節に敏感な方ではありません。夏が来れば暑いと感じ、冬が来れば寒いと感じる程度の感受性しか持ち合わせていないと思っております。それはほぼ正しい評価だと、現在も思っております。

しかしかつて、『古今和歌集』に初めて触れたとき、私たちの先祖が、「季節」を和歌に詠むことに、詠まれた和歌を「季節」に分けていることに、もっと言えば、「季節」を和歌を詠む上での制度にしてきたことに、しかも私自身それに共感していることに、一

驚いたのでした。以後私も、四季の変化について、多少関心を持つようになったように思っております。

現代の社会は、季節の変化から隔たりを見せているように見えますが、たとえば毎年三月の下旬が近づくと、誰しもが桜の開花を口にするようになりますし、秋になれば金木犀の香りを楽しむというように、常に季節の変化から受ける新鮮な喜びを満喫しようと、人々の心は手を広げて待ち構えているように見えます。地球の温暖化が進み、春と秋が短く、「四季」の変化ではなく、夏と冬が交互にやってくるように感じるようになって参りましたが、光源氏は瘡（おこり）に襲われますし、平清盛も熱帯性の熱病に犯されたことを思いますと、「季節」は決して一定の変化を繰り返してはいないことが知られます。私的なことを申せば、私の学んだ横浜の盲学校は、多摩川の河岸段丘の一つと言われる、海拔四〇メートルほどの丘の上にありますでしたが、そこには縄文時代の貝塚と、竪穴住居の跡がありました。つまり現在は海拔四〇メートルの丘の上であつても、縄文（恐らく中期）時代には、そこは海岸であつたことが分かります。海面の高さが、数千年の間にこれだけ変化していること、既にそこには私た

ちの遠い祖先が生活していたことを思いますと、気候というものがこれほどに変化するものか、そういう中で日本人は、常に季節への関心を持ち続け、そこに期待と喜びを見出してきたことに、認識を新たにせずにはおられません。まして「四季」が、わが国最古の文献である『万葉集』への記載から文字として表されていることを思いますと、気候の変化が多少大きなものであつても、「季節」を受け止める心の構えは持ち続けられるでしょうし、こういう感受性を後世の人々に受け渡すことは、さほど難しいことではないと、暢気に、樂觀的に思っております。勿論万葉人と現代人である私たちとは、異なるところが圧倒的に多いに違いありません。同様に後世の人々と私たちとも、大いに異なっているに違いありません。それはそれでよしとしても、何かが伝わるであろうことも、また間違いないことと思われまます。

以前、「『歳時記』に従って生活するようになれば健康な生活が営める」ということを、ある本で読みました。難しいことかもしれませんが、心のどこかに収めておきたいと思っております。

## 点字から識字までの距離(九九)

野馬追文庫(南相馬への支援)(十七)

東日本大震災から五年

山内 薫

東日本大震災から五年の歳月が経過した。五年を節目に野馬追文庫の活動の母体であった「東日本大震災被災地支援活動 子どもたちへ〈あしたの本〉プロジェクト」が平成二八年三月三日をもって活動を終了した。この活動の呼びかけ団体である「一般社団法人日本国際児童図書評議会(JBBY)」 「一般財団法人 日本出版クラブ(JPC)」 「一般財団法人 出版文化産業振興財団(JPIC)」のうちJBBYがJBBY Children in Crisis として引き続き支援活動を継続して下さることが同評議会の理事会で決まった。

〈あしたの本〉プロジェクトが二〇一六年三月に終了するという話は昨年十一月頃からあり、野馬追文庫を今後どうするかという問いかけがKさんからあった。ちなみにKさんが所属するジネット(お茶の水女子大学児童学科・発達心理学講座/発達臨床心理学講

座同窓会)は年度切り替えの十一月に二〇一六年も支援を継続して下さることを決めたという。

Kさんの示した選択肢は

一、三月で終了とする。

二、八月で五年になるので、そこで終了する。

三、JBBYの支援としての希望を出して継続する。

(ただし、私たちの一存では決められず、会議に計らなければならぬと思います)

四、野馬追文庫として独立してやっていく(送り方などのやり方は変更しなくてはならないと思います)

の四つで「Sさんや、Yさんは被災者ですのでこちらで決めないとならないと思います。」という意見だったが、私はやはり福島状況を一番身近で見えておられるお二人の意見を聞いてみるべきと思ってお二人に意見を伺った。

Yからは次のようなメールを頂いた。

「何事も始まりがあれば、終わりがあります。様々な事情で支援が終わるということがあれば、それも受け入れなければならないと思います。これまでのご厚意に感謝いたします。」

五年という歳月は、本当に長く、そして厳しい道のりでもありました。福島は完全に復興したわけではな

く、仮設住宅ももちろんありますが、やはり五年という歳月をすぎた今は、被災直後の状況とは異なっています。厳しい言い方をすれば、被災者であっても自立の道を歩む方法を考えていかなければならないのではないかと思えます。もし、支援を続けていたかどうかにしても、支援を受ける人たちがこれからどうしようとしているのか、その目的にかなうような支援に変えていくことが必要かと思えます。では、具体的にどのような支援と言われても頭には浮かびませんが、支援を受ける側と支援する側の意思確認は必要かと思えますが、いかがでしょうか？こんなことしか言えなくすみません。」

Sさんからは「私が住む福島市と南相馬市の状況が違うかもしれないので、判断が難しいです。福島市では、震災直後とは違ってきています。例えば、子どもたちが外の芝生の上でお弁当を食べたり、どんぐりを拾ったりするのが見られるようになりました。学校や保護者が判断して、原発事故以前のような行動をとっている人も多く見られるようになりました。安全だと判断してのことかどうかは分かりません。職場復帰後、たまたま『うさこちゃんのゆういん』を読んで、ぎよつとしました。

た。うさこちゃんは、のどが痛くて入院し、手術してしまいました。読後、私はその本の原書の初版年を確認してしまいました。チェルノブイリ原発事故よりも前の作品であったことに、少しほつとしました。私には甲状腺がんに見えたからです。それでも、もし、甲状腺がんの子どもが入院を不安に思ったら、この本で勇気づけられるかもしれないと思いました。震災前にはそんなふうに連想することはありませんでした。

震災から五年になります。五年で一区切り、でよいのかもしれない。福島の子どもたちには、たくましく生きてほしいと思います。選りすぐりの絵本を手渡し、お話の世界を子どもたちに届けたら、次は図書館でたくさんの本から自分で選ぶ、というステップへ橋渡しするという方法もあります。南相馬には、よい図書館があります。移動図書館もはじめるそうです。

私は自分自身、被災者ということで甘えてしまっているのではないかと思うことがあって、そう考えました。震災直後、ラジオのDJの『がんばれる人が、がんばれる時に、がんばれるだけ、がんばればいい』という言葉にはげまされました。私は、がんばれる時とがんばれない時がありました。でも、震災からもう五年です。決断し、歩き出さなければならぬ時期だと

思います。とりとめもない内容になってしまいました。―

お二人の意見に対してKさんは

「野馬追文庫の今後について真摯なご意見を誠にありがとうございます。なにか物事が分かりながらやってきたわけではなく、これでいいのか、これでいいのかと常に迷いながら向きあつてまいりました私たちにとりまして、おふたりのご意見は常に大きな導きです。私も昨日発送のあと、ジネットの方、JBBY事務局の方と今後についての話を交換しました。ジネットは、十一月が総会なのですが、来年度も今までどおりの支援を決めてくださっており、今までに集まった寄付金を来年度もかなり多額ですがくださる準備があるということ。必要ならば、更なる支援体制の強化も考えているとおっしゃってくださいました。JBBY事務局とも、野馬追文庫に限らずに、JBBYの今後の東北も含むJBBY Children in Crisis 全体をどうしていこうかということ、この3月へあしたの本プロジェクトが終了するにあたって、考えていく良い機会との意見で一致しています。

（あしたの本）の終了と共に、JBBYの支援を再考する話し合いを担当者（私も含む四人が今年を担当

なっています。十二月に南相馬に行った時には、南相馬の人たちの声を聞いてきます。支援の仕方は今の状況を見ながら変えていくことは必要ですし、自分たちがこれから何がどれだけできるかの実際の見通しも必要でしょう。

十一日に毎月本を届ける。その時その時の南相馬を必ず思う、忘れない。当事者でもなく、被災地に住んでいない者にとつて、忘れないでいることは、そう有りたくないとの気持ちとは裏腹に、やはり生活の中に入れこんでおくことは難しいことですが、この五年間見事に私の中から「忘れる」ことはありませんでした。この支援の方法を、何か少し形は変わったとしても、つなげていきたいとは私自身は思っています。結論というか新しい方向は、お二人からいただきました意見も大事に受け取りながら、三月ぐらいただきましかけて考えていきたいと思えます。なにか思うことがあります。とときは、どうぞいつでもお聞かせください。」とメールで回答した。

そして五年目を迎えることになったが、本を送っている南相馬の方などからは次のようなメールを頂いた。

福島市に住むKさんの知人で野馬追文庫を後ろから

支えて下さっているWさん。

「もう五年です。何が変わったのか何を失ったのか、いまだよくわかりませんがたくさんの方々とのご縁は支えになっていきます。この五年むさぼるように腑に落ちる言葉をさがしていました。そういう意味でもKさんののさかしている『本をおくる』ことは、心に降り積もる優しいめぐみだと思っています。心より感謝いたします。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。」

かのんのSさんより

「いつも素敵な本を頂戴し大変ありがとうございます。フクロウが大好きな職員・ペンギンが大好きなお子さん……今回の絵本を開くとすぐ子供たちは大喜び。動物たちの癒し効果はばっちり子供や職員たちにも届いておりました。（三月にお送りした『ほんとおおきさ特別編・元氣です！東北の動物たち』高岡昌江（著）、小宮輝之（監修）、柏原晃夫（イラスト）・尾崎たまき 学研マーケティング 二〇一二）昨年一年間、当事業所に対しましてあなたがかいご支援を賜り感謝申し上げます。絵本から「かのん」の子供たちが学んだこと……。表現する力・相手の立場に立ったものの見方・慈しみの心・憐みの心……様

々です。震災から五年目になるうとしていますが、絵本がかのんの子供たちの心に大きく影響していることは間違いなく、子供たちの心の成長が最近になって特に大きく感じられるようになってきました。きっとうちの子供たちも絵本を通じて感じ学んだことを大きくなってから思い出し、そのまた子どもに今後もその素晴らしさを伝えていってくださることと信じております。乱文ではございますが、本当にご支援に感謝申し上げます。S」

仮設住宅の生活支援相談員Tさんより

「こんにちは。いつも支援して頂きありがとうございます。野馬追文庫届きました。お忙しい中ご準備して頂きありがとうございます。三・一一東日本大震災から五年が経ちました。数字で五年ですがなかなか難しい状況は続いています。津波震災での復興もなかなか再建されない方もおり震災前のように戻れない状況もあります。本当に心の復興はいつになるのでしょうか。南相馬市も同様、復興の難しさがあります。四月からは小高区地域にも相談員が配置され皆さんを支援していくようになりました。少し前に進んでいく一歩かなと感じています。支援に癒されながら、また頑張っていくと思えます。本当にありがとうございます」



ました。」

南相馬市健康福祉部健康づくり課母子保健係の〇さんより

「五年にわたるご支援、ありがとうございます。野馬追文庫を支援してくださる方も少しずつ変化していかれるようですが、また、絵本を受け取らせていただけることに感謝しております。絵本が届くのを心待ちにしています。こどもみたいですね。さて、今日は特別な日でしたが、普通に仕事をすることができました。放射線は大丈夫だったようだといえる生き証人になりたいので一〇〇歳まで生きてみたいものだと思っております。廃炉も見届けられたら、いいなあ。本当に、いつも心を寄せてくださってありがとうございます。花粉大丈夫ですか？うちの職場の皆さんも大変そうですね。私は、そのあたり鈍感のようで、大丈夫です。季節の変わり目ですね。どうぞ、ご自愛ください。」

私事ですが、この三月末でひきふね図書館を退職しました。この一年間は臨時職員というおまけの一年でしたが、これからは月一回程度、拡大写本の集まりや講習会などで図書館に行くだけで所属がなくなりません。

## 「東京漢点字羽化の会」第121～123回 例会報告とわたくしごと

木村多恵子



2016年1月の例会（第121回）1月13日（水）

13…30～15…30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

まず、『朝日「歴史学」』の入力グループを決めた。

1月20日の印刷はIさんと、Sさんが行ってくださいることに決まった。何時もありがとうございます。

横浜羽化で入力校正し、東京でも校正のお手伝いをして、『萬葉集釋注』の漢点字版を、2016年も続けて、横浜の中央図書館に納入する。（第4巻である。）

4月の活動予定を決めた。

基本的な記号類、その他入力方法について質問を受け、今回も岡田さんの説明を聞いた。

『古語辞典』の入力の進捗状況を確認した。全体の半分強ではないかと、岡田さんが言われた。

今日は実際には漢点字を直接点字用紙にどう書くか、簡単に説明した。こんど時間がとれたらパソコンを通さずに手打ちで書いて見ましよう、と話した。

## 2016年2月の例会(第122回)2月10日(水)

13…30、ヒューマンプラザ7階第2会議室  
先月の学習会(1月23日)は、前日から「明日は雪が降ります。交通機関にも気を付けて下さい」とのあたりがたくない予報が盛んに報じられていたので、当日の朝早く、学習会は中止と決めた。したがって2月20日が「学習会第95回」となる。

この1月の学習会の日、「パソコンを使って漢点字点訳をしてくださるボランティアを求めています」というお誘いとお願いのチラシを見て下さった方が、見学に来てくださるお約束ができており、このことが残念に思っていた。けれども、その方が今日の2月の例会にお出でくださり、会員になってくださった。ありがとうございます。

Y様、どうぞよろしくお願いいたします。

3月と4月の活動日の確認と5月の活動予定日を相談した。

何時ものように朝日の記事入力グループ分けを決めた。

3月16日の横浜での印刷には、IさんとSさんが行ってく下さると申し出てくださり、このことも安心できました。

I様、S様、何時もありがとうございます。

朝日の記事の中での具体的な入力方法について、古語辞典の文字について、記号類について、質問を受け、岡田さんの説明を聞いた。

今日は漢点字を、漢点字用の点字板を使ってそれぞれご自分の名前を書く練習をした。

「テキストコンバーター」を使うと、漢点字が表示されるので、皆さま改めて興味を示されて「名刺」のひな型を作っていらした。

## 2016年3月の例会(第123回)3月9日(水)

13…30、ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

「パソコンを使って、漢点字点訳をしていたらボランティアを求めらるらし」を見てくださったので、この3月の例会にお出で下さった方が、2月の例会に引き続いてもう一人会員にご参加くださった。

K様、ありがとうございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

今日は、ご事情で暫く例会へのご参加をお休みしていらしたMさんがお出でくださった。

2月20日の学習会は、またも「大雨になり、交通機関も危ぶまれる」との厳しい気象予報が出されたので、岡田さんがやむを得ず中止を決定した。

従って、3月19日が、通算95回目となる。

3月16日の漢点字印刷を、Iさんと、Sさん、よろしくお願ひいたします。

朝日の歴史学の入力校正のグループをまず最初に決めた。

新しいお二人にも早速グループに入っていたいただいた。

岡田さんが、新しい方がいらしてくださいだったので、点字の、歴史、漢点字の歴史、「羽化の会」の活動方

針と、歴史をお話した。

そして、漢点字用に入力していただくための留意点も話された。

「東京漢点字羽化の会」の名簿の改訂版を作っていた。

学習会の原則として第3土曜日とし、学習を始める時間を、これまでより1時間早めて、17:30～19:30と変更する。

4月23日の日には変更できないが、時間は17:30からに改める。

木村の知人で、「機関誌羽化」の、ある読者から、「羽化20周年のお祝い」として、横浜と東京に貴重なご寄付をいただいた。ありがとうございます。感謝して有効に使わせていただきます。

#### \* 予告

2016年4月の例会（第124回）、4月13日（水）

13:30～15:30、ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2016年4月の学習会（第96回）、4月23日（土）

17:30～19:30、ヒューマンプラザ7階

第2会議室

2016年5月の例会（第125回）、5月11日（水）

13・30～15・30、ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2016年5月の学習会（第97回）、5月21日（土）

17・30～19・30、ヒューマンプラザ7階

第2会議室

2016年6月の例会（第126回）、6月8日（水）

13・30～15・30、ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2016年6月の学習会（第98回）、6月18日（土）

17・30～19・30、ヒューマンプラザ7階

第2会議室

## わたくしごと

「昭和20年、8月6日・9日・15日」

と、太平洋戦争終結につながる忘れがたい日にちを、見事にまとめた方がおられる。

現在60歳代以上の日本人であれば、たいていの誰もが、はつとさせられる日だと思う。

改めて説明する必要はないかもしれないけれど、昭和20年8月6日は、米大統領トルーマンの命令によって、人類史上初の原子爆弾が、広島に投下された日である。

9日は、日本に更なるダメージを与えるかのよう  
に、広島に落とされたものとは異なる形式の原子爆弾、  
もう既に作ってしまった原子爆弾を、使ってしまったな  
ければならないかのように、長崎の上空からも投下し  
た。

そして8月15日、日本はポツダム宣言を受諾し、降  
伏文書に調印し、敗戦の日となった。

ごく真つ直ぐに言えば、戦争は、自分が所属してい  
る国が勝ったとしても、直接戦場に立たされる個人に  
とっては、戦死も戦傷もあり、結果として勝つても負  
けても不幸である。

戦争に限らず、人にはそれぞれの忘れられない「そ  
の日」がある。

それがその人にとって、とくに喜ばしい日であるな  
ら、それは幸いである。そのような「特別の日」をい

くつか持っている人はさらに幸せに違いない。なぜなら、喜びはどちらかというところであり、悲しみは多くの人と共通していることが多いからである。

近年のことを思い起こしても、群馬県御巢鷹山での日航機墜落事故、阪神淡路大震災、東京地下鉄でのサリン事件、近くは2011年3月11日の東日本大震災は、大きな津波を伴い、さらにさらに今なお危険にさらされている福島の問題を抱えている。

どれをとっても厳しいことばかりなのに、わたくしは肉体的に被害を受けていない。が、一人の人間として心を痛めているのは多くの人と同じだと思っている。

70余年生かされてきたわたくしも、誰もが経験する肉親や親しい友を失った悲しみを知っているが、直接わたくし自身が死の危険に直面したことはない。

ところが、家族や親類を通して、わたくしは間違いなく自分の命が救われていることを知らされている。

それは昭和20（1945）年3月10日の東京本所、

浅草の大空襲、あの早乙女勝元さんの詳細な記述で知られている東京大空襲のことである。

わたくしは兄4人、姉1人の6人兄弟で、両親とわたしたちは東京浅草で暮らしていた。

昭和20年のこのとき、既に長兄は兵隊に取られていた。

何時から、どのように具体的に父と次兄Aと、川崎の田舎の父の自家の伯父との間で相談が進められていたかは知らないが、ある日、母とわたしたち下4人の兄弟は、次兄Aに送られて父の自家へ行くことになった。

A兄は、新宿までわたしたちを連れて行き、無事小田急線に乗せてから、少し大きくなった3番目の兄Fに、「お母さんを助けて、気をつけて伯父さんの家に行きなさい」と言葉にならない言葉をかけたであろう。そしてA兄は浅草へと戻っていった。

わたしは母の背に負われていたと思う。電車が混んでいたかどうかも知らないし、その日が正確にいつなのかも分からないが、少なくとも昭和20年の初めには疎開していたようだ。もしこれよりもっと遅くなつて

いたら、小さい子供を連れての移動は困難だったと、聞かされているからである。

3月10日の夜空を焦がす真っ赤な東京を呆然と見つめていた母や伯父夫妻、従姉たちも、まだ浅草に残っている父やA兄のことをどれほど案じていたことか！

空襲後1週間ほど過ぎて、大火傷をして包帯だらけの父が、次兄Aも伯父のところへ戻っているだろうと期待して帰ってきたが、いない。父の話によると、襲のさなかに、近所の家の青年と、Aに向かって「直ぐ田舎へかえれ！」と言ったものの、気になって念のため遺体収容所に行ったが、見つからなかったのも、伯父のところへ帰っただろうと思ったという。

父や伯父たちは「明日は帰って来るだろう」と待ちわびていたが、日はむなしく過ぎていった。

後々（わたしが学校を卒業してから）、従姉妹が、「叔母さん（わたしの母）は、なにも言わずに毎朝毎晩玄関口でたたずんでいたの、最初は待つているんだ、と思っていたけれど、そのうち、その姿を見ているのが辛くなってね、そのことをお父さん（従姉妹の

父、わたしの伯父）に話したの。そうしたら叔母さんは外へ出なくなっただけで、今度はその姿を見なくなったこともかわいそうだった！」と、わたしの手を握りながら涙をながしていた。

昭和21年1月の末近く、父はどこかの新聞で、長兄の部隊が復員船に乗れるという記事を読み、追い打ちをかけるように、その船が沈み、全員死亡という記事を読み、落胆しきって悄然と家に戻ってきた。

が、その1月29日の真夜中、戸を叩かれて、出て見ると、「幽霊だ！」と驚かされたほど痩せ衰えた兄が立っていた。家族全員真夜中に起こされて兄の無事を喜んだことはいまでもない。

長兄の話で、船が沈んだのは確かで、しかも、その船に乗船したのは、現地中国にいた邦人で、その人たちを先に帰国させ、兵隊はその後の便と、命じられたという。

いったい運命は何処で分かれてしまうのだろうか？

このような際どさの中にもかかわらず、戦地から無事帰って来られた長兄と、父は早々に一家を浅草に移

した。

わたしはまだ学齢に達してはいないけれど、横浜の寄宿生となった。

その後、小学校2年か3年の夏休みになってからであらうか。母に連れられて父の実家へ行ったときのことである。従姉妹がわたしを出迎えて「大きくなったわね、元気になってよかった」と言いながらわたしを抱きしめてくれた。わたしにはこの従姉妹の深い思いやりの言葉の意味が分からなかった。喜んでくれることはわたしにもわかったけれど、子供心にも気恥ずかしかつたことをよく覚えている。そのころわたしは疎開して、この一家に世話になったことの意味をよく分かっていなかったのである。小さいうちに、親からも離れて暮らしたので事情が飲み込めていなかった。

けれどもその後、わたしが小学校3年の終わりに父が死に、わたしが家から通学するようになった高校時代になってから、家族がゆったりと集まった時々、東京空襲を奇跡的に免れた訳を知るようになった。そして初めて、あの日の従姉妹のただならぬ喜びの意味

を知ったのである。

それからわたしは戦争に関する小説や各地の被害の記録などを読むようになった。

今年の東京平和記念日（3月10日）に3番目の兄から「わたしたち兄弟は、A兄さんたちのお陰でこれまで生きてこられました。」というメールが送られてきた。

東京墨田区本所に戦災慰霊堂がある。母は、行方不明のままのAの名前を、この慰霊堂に納めて少しばかり慰めを得たようであった。この母も80余歳で病死したが、その死の間近に、意識の混濁状態になったとき、18歳で戦災死したAの名を呼び、さらに二人の男の子の名前を呼びかけていた。この二人の男の子は赤子のうちに早逝したわたしの兄である。

命とはなんと尊いものである。一人一人の命が、数え切れないほど多くの人の命とかかわりあっている。

それだけに、人間が引き起こす愚かな戦争は決してしてはならない！

2016年3月30日（水）

白眉はくび

馬良字季常、襄陽

宜城人。兄弟五人、並

有才能。郷里為之諺

曰、「馬氏五常、白眉最

良。」良眉中有白毛。

故以称之。先主称尊

号、以良為侍中。

(蒙求、下、馬良白眉)

参考図書 『漢文名作選 第2集6

故事と語録』(大修館書店)

馬良ばりょう字あざなは季常きじょう、襄陽じょうよう宜城ぎじょうの人なり。兄弟けいてい五人、並びに才名さいめい有り。郷里こうり之が為ことわざに諺ことわざして曰わく、「馬氏ばしの五常ごじょう、白眉はくび最も良し。」と。良りょうの眉び中ちゆうに白毛はくもう有り。故に以て之を称せんす。先主せんしゅ尊号そんこうを称するや、良を以て侍中じちゆうと為す。

馬氏の五人兄弟はみな優秀だが、なかでも白眉(馬良)が最もすぐれていると、郷里では諺のように言われた(最良と良の名をかける)。良は眉毛に白い毛が生えていたので、白眉と呼ばれていた。劉備の即位した時、良は天子の側近である侍中に任じられる。

(多くの優れたものの中でも特に優れた人、またはものごとを「白眉」と言うようになった。)

馬良 || 三国時代、蜀しよくの劉備りゅうびに仕えた。

五常 || 五人兄弟すべての字あざなに「常」の字が

含まれる。故事「泣いて馬ば諤しよくを斬る」

の馬諤(幼常)は、馬良(季常)の弟。

先主 || 劉備(在位、221年〜223年)。





白眉

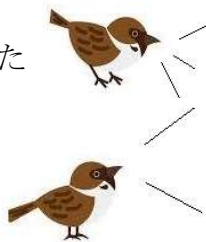
馬良字ハ季常、襄陽宜城ノ人ナ  
 リ。兄弟五人、並ビニ有才名。  
 郷里為ニ之ガ諺シテ曰ハク、  
 「馬氏ノ五常、白眉最モ良シト。」  
 良ノ眉中ニ有白毛。故ニ以  
 テ称ス之ヲ。先主称スルヤ尊  
 号ヲ、以テ良ヲ為ス侍  
 中ト。(蒙求、下、馬良白眉)

もうぎゅう  
『蒙求』

746年、唐の李<sup>りかん</sup>瀚が編さんした  
 故事集です。初心者向けの教科書  
 として広まりました。日本には  
 平安時代初期に伝わったと考え  
 られています。

あまりにさかんに読まれていた  
 ため、学問所では庭の雀たちまでもが  
 「蒙求をさえずる」などといわれる  
 ほどです。

現代の我々にもなじみのある  
 エピソードが多数おさめられています。  
 (京都大学電子図書館「蒙求」より)



もうぼさんせん  
孟母三遷

そうせきちんりゅう  
激石枕流

♪ 螢の光  
窓の雪  
(螢雪の功)



## 「報告と」案内

### 一 賛助会費

昨年・二〇一五年度も、多くの皆様から賛助会費のご納入をいただきました。左にご芳名を掲げて、感謝申し上げます。

大滝正雄様 日本漢点字協会・川上リツエ様

吉野紀恵様 雨宮絢子様

政井宗夫様 武田幸太郎様

遠藤幸裕様 関口常正様

田崎吾郎様 岡稲子様

河村美智子様 高橋かず様

京野春美様

誠にありがとうございます。今後の活動に生かさせていただきます。

### 二 漢点字版『萬葉集釋注』第四巻が完成

岡田の拙稿でご報告致しましたように、伊藤博著『萬葉集釋注』第四巻（集英社文庫）の漢点字版が、



このほど完成致しました。例年通り、横浜氏中央図書館に納入させていただきました。受け入れが完了し次第、貸し出されます。館間貸出の制度をご利用いただけます。全国どちらからも貸し出しを受けることができます。大いにご利用下さい。

漢点字訳の底本にしております文庫版は、同書のハードカバー版が文庫化されたもので、内容には変更はございません。ただ、いわゆる万葉仮名で表記された「原文」が割愛されております。漢点字版ではハードカバーからその「原文」を借用して、歌の後ろに置きました。これによって万葉仮名がどのように使用されているかに関心をお持ちの読者のご希望にも、お応えできるものと考えます。「人麻呂歌」の「非略体表記」と「略体表記」も、容易に比較していただけます。

第四巻は、巻第七と巻第八が収められております。漢点字版は十一分冊、分冊一〜分冊五は巻第七、分冊六〜分冊十は巻八、分冊十一は補注となっております。それぞれの歌は、漢字仮名交じり文・総ルビ・原文の順に、行分けしました。その後ろに伊藤先生の「釈文」が置かれています。「釈文」は第一・二・三

巻と同様に、歌の解釈、成立年代と事情、編者の意図、後世の解釈など、多彩な、興味深い記述が続きます。加えて分冊十一の補注も参考にしていただけますと、興味はいや増します。

分冊十には、三田誠司先生の解説と、篠弘先生の「『玉葉』の万葉復興」と題されたエッセイが収録されています。『玉葉集』は二十一代集の一つで、京極為兼の撰、一三一三年に完成した勅撰和歌集です。

ご愛読いただけますことを願って止みません。

なお、日本漢点字協会にお申し込みいただけますと、価格差保障の制度によってご購入いただけます。

ご検討下さい。

### 三 『史料徹底検証 尖閣領有』

漢点字へのご理解とご支援を惜しまれない、元横浜国立大学教授・村田忠禧先生が、昨年上梓された書籍です。国際情勢が厳しくなっていると言われておりますが、そんな時こそ冷静に歴史を学ぶことが求められます。

《本書は日本政府の「尖閣」領有過程の検証に的を

絞り、1885年から1895年までの時期を検討対象にし、当時の内務省、外務省等の公文書をできる限り漏れなく集め、丹念に整理し、事実がどのように展開して行ったのかを公文書の記録に基づいて解明したものである。／ 付録として根拠となる史料を収録し、読者諸氏がご自身で検証できるようにした。／ 筆者の分析に疑問が生じた場合は、ぜひ典拠にしている付録史料を見ていただきたい。／ 本書の最も価値ある部分はこれらの史料群と言っても過言ではない。

（「はじめに」より）》

著者・村田忠禧 単行本・208ページ

出版社・花伝社（2015年1月24日）

### 四 漢点字学習会

今年度も横浜と東京で、漢点字の学習会を開催致します。横浜では第一回を5月15日（日）から隔月に、東京では第三土曜日に行います。オリジナルのテキストを使って、漢字の字形と漢点字の関係などを織り込みながら進めます。詳細はお電話かメールでお問い合わせ下さい。

## 編集後記

▼今やパソコンはすっかり生活の一部として取り込まれ、ものを書くのもパソコンのキーボードでということが一般的になっていきます。そうになると、漢字を手で書くという行為はほとんどなくなつて、目の前に現れた単語のリストから適切なものを選ぶという行為に置き換えられてしまいました▼われわれのように、小さいときから漢字書き取りを一生懸命やってきて、正確に漢字の書き方を覚え、沢山の漢字を間違ひなく書くことが出来た者でさえ、漢字を手で書く機会が減つてくると、いざ書こうとしたときにどうしても正確な漢字を書くことが出来ず、パソコンで文字を表示して、それを見ながら書き写すという情けない状態になってしまいました▼更に進んで、漢字を手で書くことはよほど特殊の場合のみだという世の中になつた場合、日本語の中の漢字の役割はどうなつてきているのだらうと考えてしまいますが、日本語を表示するのに漢字が欠かせないもののであるという事実は一向に変わらないので、書くというのを機械にまかせても、何ら問題があるわけではない、ということなのかもしれません。

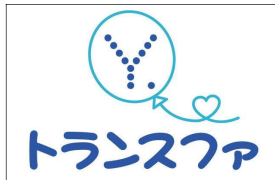
木下 和久

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者総合支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー２級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada\_tr\_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。